《問》「情報」の原点は何だろう？《答》それは「詩」だ！ —東西の賢人・人文科学・自然科学の知見によって、そう考える—

Q: What is the Origin of *Information*? A: It is Poetry! **A Consideration based on the Knowledge of Wise Stages of the** **Orient and the Occident, and Human and Natural Sciences**

藤原鎮男
Shizuo FUJIWARA

本学会元会長・名誉会員，東京大学名誉教授
Former President and Honorary Member of JSIK; Professor Emeritus, The University of Tokyo

1 はしがき

ここでまず、「情報のはじまり」は「ヒトのコミュニケーションにある」と定義する。そうとなれば「情報の原点」探しは、「ヒトのコミュニケーションのはじまり」探しとなる。探した結果は、東西の賢人の考えが一致し、また、その結果が人文科学畑からと自然科学畑からした探求結果と一致した。「原点」がコミュニケーションで同じなのだから、すべてが一致するのは当然なのかもしれないが、東西、それに人文科学、自然科学が同じになったことに筆者は驚いた。

2 情報・情報学の定義と情報の原点

情報学は科学の一分野である。それ故、「科学」を「自然の本質を明らかにする学問である」と定義すれば、「情報学」も「自然の本質解明を目的にする学問」であることになる。そうすると、「情報がそもそもヒトのコミュニケーションで始まった」のだから、「情報学」は「ヒトのコ

ミュニケーションの科学技術の学問である」ことになり、「情報の原点」を探ることは「ヒトのコミュニケーションの原点」を探ることとなる。この意識で本報では古今東西の賢人の足跡からこの原点を探ろうと思う。

結論を先に述べると、筆者は、「ヒトのコミュニケーションの原点は詩である」と立論し、この立論が成立することを東西の古人の著作で示す。さらにはこの実証作業を、人文科学畑(human science)で始め、近代自然科学(modern science)に広げて近代自然科学の出発点であるニュートンに及ぼし、人文科学と自然科学が一致した結論になることを述べる。

「情報」には二面がある。それは、「ヒトのコミュニケーションの内容」に二面があり、文字や言葉や絵画、音楽などのように「実体的」表現の「情報」と、「感情」のような「実体」的にあらしにくい「情報」があるためである。便宜上、前者を「ファクト的情報」と呼び、後者をそれとの対比上「非ファクト情報」と呼ぼう。

ところで、筆者には、今の情報学の専

門家がしていることは言語, 記号, 論理, あるいはそれら処理する機器やシステムに関わること, すなわち, ファクト情報がらみがすべてであることを残念に思う。それで本報では, 「非ファクト的情報」を対象とし, その本質は何かを考える。

3 東西の賢人の著作による「情報の原点」の考察

「ヒトのコミュニケーション」はヒトの所為である。ヒトの所為が思考と経験の結果であるとする, 「老人」はヒトの中でもっとも思考と経験を集積した者といえるだろう。そこで, この「老人」がする「コミュニケーション」を先ず考えることにする。とくに「コミュニケーション」と言っても「言葉」だけでなく「老人が発信するものすべてを指す」ものとする。以上のような立論で筆者は以下に「老人の発信」を考える。

先ず, 日本の賢人の代表として世阿弥を選び, 彼が「老人の発信」をいかに考えたかを見たい。つぎには, 西欧の代表としてゲーテを採り対比する。そしてさらに, 思考の範囲を世阿弥やゲーテの人文科学畑から自然科学畑にまで拡張したい。

3.1 日本: 世阿弥

世阿弥は人間の生態を「神, 男, 女, 狂, 鬼」に五分類し, 能楽二百余番に描いた。つまり, 人間観察の先達だ。その彼は, 女性の老いの行方として百歳になった「小野小町」(おののこまち) を, 「卒塔婆小町」(そとばこまち), 「鸚鵡小町」(おうむこまち), 「関寺小町」(せきでらこまち) の三態に描き, その中で「関寺」

を最高とした。

「関寺」を最高とすることは現在までの能楽 700 年継続の事実である。700 年継続したということはそれだけ世の中が受け入れて来たということであり, 筆者は, この事実は「関寺」が「日本人の心情」の根本を衝いているためだと思う。

少し説明すると, 「卒塔婆小町」は墓石に腰掛け, それをたしなめた坊さんをやりこめる「理性」老女。「鸚鵡小町」は帝の和歌を一文字変えただけで「歌の興趣」を一変させた「叙情の達人」老女。どちらも女性の老後の姿として立派である。けれども, 世阿弥はそれらを採らず, ただ何もせずじっと座るのみの「無為」の「関寺小町」を推し, 世間もこれを可とした。

どういふことなのだろう。考えて思うのは, 卒塔婆小町は理性の終点の姿であり, 鸚鵡小町は百歳になっても往年の歌道の天才と尊重された栄光を忘れ去ることが出来ない老女。つまり, 前者は「理性」, 後者は「感性」の代表で, 所詮まだ「生々しい人間の域」にある。世阿弥はそういう「人間臭い所を超えた抽象の状態がヒトの発信物として理想的だとしたのではないか。世間がまたそれを認めたのは, 日本人の意識の底に「人間臭い域」を脱却した状態を理想とする」思いがあるのではないかと思った。

確かに日本や中国では先人が「無の世界」とか「無為の世界」を言い, 武道でも「無手勝流」を尊重する。「無」とか「気」というものが存在し, それが世の中の《実態的な「物」や実体的な「事」》より上位の力を持つとしている。「無」・「気」上位の位置づけが世阿弥の結論かと思った。しかし, 分かったようで分からなくもあ

った。

3.2 ヨーロッパ:ゲーテ

さて日本に対して外国はどうだろうと思ひ、世界の文豪のゲーテがどうかと見たら、彼が似たようなことを考えているように思えた。ゲーテに詳しい友人に、「ゲーテが晩年の著作の表題を『詩と真実』としたわけをどう思うか」と尋ねたところ、「ゲーテの著作は全部彼自身の体験談だ。だから、『詩と真実』の『真実』のほうは『その体験談』だ。けれども『詩』は何かな」と言う。そうすると、ゲーテの人生の総括の核心が「詩」となる。世阿弥が「無為」で、ゲーテが「詩」。また分かったようで分からぬことになり、「詩」とは何だろうかとなった。

4 情報の原点:詩

4.1 「詩」:短歌, 俳句, 川柳

当初、筆者は漠然と「詩とは人間の本質を把み、それを表明する力を持つもの」と思ひ、これで的に近づいて来た感じで「詩至高」が結論かという気になった。

しかし、それでもなおかつ、それでは何故「詩が至高なのか」が残った。「詩」の本体が分からない。ゲーテが一生を書き、「詩と真実」と表題したからには、彼は「真実」に対比すべき「詩」の存在を意識している。しかし彼はそれを明示しない。明示せぬのは何故だろう。ゲーテの「真実」は「ファクト情報」であるとしよう。となると、「真実と呼ぶファクト」とは「別のもの」の存在を彼は認識しているのだ。ゲーテは勿論詩を書いている。彼がその詩を「詩と真実」の詩に据えているとは思えない。

世阿弥の「無為」、日本人が評価する「無」とか「気」のようなものの存在をゲーテは掴んでいて、それを「詩」としたのではないかと吾人は考えたい。ゲーテの「詩」は十七文字の俳句や川柳が発信する「無形の情報」をさしているのだろうか。となるとやはり問題は「詩」である。それで筆者は「詩」に拘泥する「はめ」になった。

我々が「詩」と呼んでいるものの始まりは「文字」の始まりと前後する。その始まりは、中国の「詩経」らしい。となれば、それは五千年も前だ。だから文明の始まりであり、人類の最古の文字記録だ。かくて、「詩」とは何かにという問題になって、話は加齢の終点などという心細い話ではなくて、文明の起源、つまり、人間の「知的活動」の始まりと、それよりもっと前の人間の本源的な悟性、感性の関わりについての設問になった。

そこで筆者は年来の知己の海洋学者で芸術家のT氏に尋ねた。それもあるべく具体的なほうがよかろうと思ひ、「ゲーテの「詩と真実」における『詩』は何でしょう」と尋ねた。氏は先に小生に、東洋美術は「削(そ)ぎ」、西洋美術は「足し」だと教えてくれた方である。この教えは吾人が趣味とする陶芸の指針になった。氏は暑中一ヶ月考え、しばらくして待望の返事を下さった。それには在米の比較文学専攻の令嬢まで巻き込まれていた。

氏と氏の令嬢は、ともにゲーテの書名の「poetry」を詩と訳したのはだれかと考え、それは鵑外だろうと推論した。語源に話を持ってゆかれたのには筆者も賛成で、こちらの思案にピッタリ合う。そもそも、作業の始まりが「詩」の「始まり」だから、「詩」の語源探りは良い思案

だ. そうしたら, 「詩」の始まりは「詩経」であり, 「詩経」が同時に文字, 記録の始まりだということになった. 確かに, 「詩経」自身が「詩」なのであった. ここは少し説明が要る.

4.2 「詩」の始まり

中国の「詩経」は日本の万葉集と同じで, 中国の民族, 民衆が生んだ日常生活の「声」であり, 「歌」であるらしい. その記録が「詩経」なのだ. (「うたの始め詩経」, 目加田誠訳, 平凡社, 1982; 「詩経入門」, 趙浩如著, 増田栄次訳, 日中出版, 1988 参照). ただし, この両書の解説は本稿の論調に少し外れる. 目加田解説は詩経の文学的評価に重点があり, 中国の趙浩如解説は, 「詩経は人民・大衆のために尊重・評価される」という論調で偏りを感じる.

5 詩経

T 氏のお蔭で筆者は「詩」の起源について知識を得た. 広辞苑によれば「詩の起源」は, 第一に詩経. 中国最古の詩集, 孔子の編, 殷の時代から春秋時代までの詩 311 篇 (殷は前 11 世紀まで). 第二にギリシャの詩人ホメロス (前 9 世紀) のイリアス, オデュッセイア. 第三に万葉集. 仁徳天皇から淳仁天皇時代 (759 年) まで 350 年間の歌である.

T 氏によれば, 「詩」の起源とすべきこれらの古典に共通するものは声つまり言葉である. 文字の産まれる前は「言葉は伝承の媒体」であった. 「文字」が産まれると, それが記録媒体になった. 「詩経」は情報媒体が声から文字に変換した革命期に出来たのである. 本稿が今論じてい

る「詩」はこのときのプロダクトなのだ. だから詩に共通するのは, 「声を出して読むと心地よい」ことだ. それは「声」の文化へのノスタルジーで詩へのあこがれが我々にあるのではないかと. 明快!

6 詩の属性

6.1 音声, 詠唱

おりしもこれも高校同級の別の友人から, 先便の「詩至高論」に同感とし, さらに現代人が音読の良さを忘失したと嘆いてきた. 彼は, 新聞社のロンドン支局に長らく勤務し東西にわたる文化観の持ち主である. 彼にはすでに筆者の世阿弥の老人観を通信してあった. 彼の手紙で小生は, かれこれ 20 年も前の類似の経験を思い出した.

ある中秋の名月の晩, 同僚に頼んで各自の専門の「月」を語ってもらった. 英文学, 仏文学, 独文学の月のイメージから物理の月の軌道論までスパンはひろがった. なかで感動したのは, 筆者の研究室に当時滞在中の中国の女流学者による蘇東坡の詩の朗読だった. 嫋々たる音声 that 酒杯に響く思いであり, 詩は目で読むものでなく, 声を出し, 耳で聞くものとそのとき痛感したことだった.

もう少し言えば, 「詩」は単刀直入に核心を衝く. これと似ているのが「かけ声」, 「符牒」だ. こちらは「核心」を「音声」で表す. これに対して, 「詩」は「文字」で来る. さらに蛇足すれば, 「ひらがな」は文字に由来し, 「カタカナ」は「音声の符牒」に由来するようである. 「ひらがな」は我が国の千年の歌の世界を育てた. 「カタカナ, 符牒」は魚, 野菜の市場で活きているが歌道に相当するものをまだ生ん

でない。近頃の若者の情報交換のスペを見ると「符牒」依存の気味がある。これが新時代の創世かどうかは分からない。これは蛇足。

以上で「詩」が人の心の深い所からの発露だと分かり、日本、東洋、西洋を問わぬ「ヒトの共感」の媒体であることが理解された。ここまで理解が進んだら、筆者の頭にニュートンが登場した。結果から見るとそれは、世阿弥ないしゲーテという人文科学畑の議論が、近代科学に通底することを証することだった。

今までの議論で、「詩」が「人間の心情表現」の核心媒体だとなった。それが「音声」と「文字」であるという。よかろう。ただし、それは「情緒の世界」,「非ファクト」ののこた。それが、ここで今、我が思考はニュートンに会い、「ファクト」に向かうことになったわけである。

6.2 「情報学」との接点

「詩」の発見で、筆者は「ヒト」が言葉を得、文字を持ち、「心」を表現して他人とコミュニケーションする「詩」が始まったと結論した。これで、非ファクト情報の原点が「詩」だとなった。これは人文科学の世界だ。ならばバランスを考えて「ファクト情報」の世界はどうだろうかである。自然科学をファクト情報の世界とすれば、その開祖はニュートンだろう。このニュートンが世阿弥の「無」、ゲーテの「詩」にあたる何かを考えたかと思ったら、あった。「質点」(point mass)の概念である。

7 ニュートンの「質点」とゲーテの「詩」

7.1 ファクト情報の原点としての「質点」

以上、非ファクト情報の原点が「詩」であると立論し、その結論を固めた。それでは対比されるべきファクト情報はどうかと設問したら、「ニュートン」が答えてくれていたのである。

ニュートンは彼の「物理学」を「質点」の概念で展開した。「質点」の概念で「物質」というこの世で実体を持つ「モノ」の存在が抽象化され、その運動を始めとしてもろもろの近代科学の情報が生まれ、蓄積された。であるから「質点」はファクト情報の原点と言ってよい。ウェブスターの辞書を見ると、《「物質」とは空間に広がりを持つもの》と定義されている。ニュートンは《「物質」の質量を担い、かつ広がりを持たぬ「点」を仮定し、「質点」とした》。

この質点の概念のお蔭で、物体の運動は数式的に解き明かすことが可能になった。実体的な「質量」でなく、空間的な広がりを持たぬ「点」に「物質」の質量が存在するとして、点の質量の運動方程式を書き、その他もろもろの物理学の議論、つまり、会話を成立させることが出来る。空間的広がりが無いのだから、五感で「点」に存在するという「質量」の存在を知ることは出来ない。しかし、運動方程式で「質点」の運動は解析できる。

7.2 ゲーテの「詩」

ところがである。筆者には、実にゲーテの用語がこの「質点」を包含しているように思える。蛇足の説明を繰り返せば、ゲーテは「詩と真実」を著述して生涯の軌跡を記した。因みに、「詩と真実」の英訳版は、"Poetry and Truth"で、原書名は、"Aus meinem Leben: Dichtung und

Wahrheit"である。彼の「人生の諸事実」つまり「ファクト」は書名の「真実」で示され、それとは別にその本質、核心にあたるものがあるとし、これを露わにせず、ただ「詩」を表題に据えてその「存在」を指摘したと筆者は理解した。問題はその先である。

筆者は、ニュートンの「質点」の概念が、ゲーテの書名の *Dichtung* (独和辞書はこの文字に「詩」の訳をつけている) に隠れているとしてよいのではないかと思う。何故なら、ドイツ語の *Dichtung* はまた、密度＝質量を指すから、このドイツ語はニュートンの「質点」の概念をも包含すると言える。強弁すれば、天才のゲーテは事物の核心を指示する文字が *Dichtung* であるとし、"*Dichtung und Wahrheit*" と著作の書名にした。

となると、「情報学」の立場で言うと、我が迷論は「ニュートン・ゲーテ合一」としたくなる。森鷗外が、ゲーテの著作名を「詩と真実」とせずに「質点と真実」としてくれていたら、問題は簡潔に終結したであろうが。

さて、ニュートンは、「自然科学の自然」を「質点と質量」の表裏で表し、ゲーテは、「人生」を「詩と真実」の合体だと言い、世阿弥は「人」は「動」と「静」の二面だと言う。情報学は、この世のことは、「ファクトと非ファクト」の二つからなるとする。そうすると、現在の情報

学は「ファクト情報」に偏っていて、「非ファクト情報」の把握なり、表現なり、あるいは、その科学技術からあまりに遠ざかっていないか。少なくとも、「情報学」がなすべきこととしては、「五感になじまぬ非ファクト情報」の本質を目に見えるようにすることにも努力すべきではなかろうか。

妄論をさらに進めれば、この二面論はこれで終わりにならない。まだ先がある。ニュートンの質点と質量の二面はアインシュタインの質量とエネルギー等価説で一体化された。ならばゲーテの「詩と真実」も同様に一体化されるものかもしれないし、情報学の「ファクト、非ファクト」の情報も、何らかの形で一体化されるのかも知れない。「情報学」は「科学の科学」である。であるから、この一体化こそ情報学が目指すべき目標といえるかも知れない。

そこでもう一つ蛇足を添付したい。筆者は本記念誌に別稿「一化学徒の『情報学』の軌跡」を投稿した。これは、筆者の情報学の「ファクト」である。その最終段に、連歌の語彙について立川美彦氏と一緒にした共同研究の結果を述べ、約10の連歌の語彙を日本人の「情緒」の集約として紹介した。つまり、筆者の「わが情報学」の「詩」である。「情報学の原点」で始まった迷論が、これでどうにか「終点」に達し得たかの思いである。